

第9回南アジア考古学国際集会について

桑山正進・徐 朝龍

Centre de Recherches Archéologiques, CNRS が発行している *Lettre d'Information : Archéologie orientale* 8 (décembre 1986) に開催が広告されたとおり、1987年7月6日から7月10日までの5日間にわたり、Venezia にて第9回南アジア考古学国際集会 (the IX International Conference, Association of the South Asian Archaeologists in Western Europe) がおこなわれた。桑山は、今回の主催者である Roma の Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente (IsMEO) にインド・パキスタン・ネパールの研究者とともに日本からの最初の研究発表者として招待され、かつ7月8日午後の Section B (歴史考古部門) で議長をつとめる機会を与えられた。また、四川大学出身で京都大学大学院考古学の博士後期課程に在籍中の徐朝龍は、中国からの最初の研究発表者となる機会を、1985年以来学会長である Maurizio Taddei 教授から与えられた。この機会に今回および従来集会について簡単に報告をしておきたい。

1960年代後半からハラッパー文化に関する現地調査が急速に進んでくる。小規模な遺跡の発掘やインダス水系全域にわたる分布調査が数多くおこなわれ、またモヘンジョダロの再検討もはじまる。それにとまっていわゆるコトディジ文化の単純遺跡がとくに北方に偏して分布していることも次第に判明してくる。この動きに大きな impact を与えたのが Shahr-i Sokhta や Tepe Yahya などイラン南部や東南部の発掘である。しかし、そういったパキスタンの内部における各シーズンの発掘概略がパキスタン考古局に提出されてファイルされる一方で、成果が第三者に伝達される機会はいちじるしくすくない。そして必ずしも迅速に発掘成果が発表されるわけでもない。とくに先史考古の分野では、関連の研究者間にあたらしい情報をできるかぎり早く伝える情報交換の場が不可欠になる。この状況をいち早く感じていたのが、F. Raymond Allchin-Bridget Allchin 夫妻である。かれらはそのために何らかの連絡機関を設ける必要にせまられる。

1970年夏に夫妻は私的に、つまり経費の問題から、西ヨーロッパ在住の主な南アジア考古学者のみを招集する。オランダから Joan-Engelbertha van Lohuizen-de Leeuw 教授が、イタリアから Maurizio Taddei 教授が、ヘルシンキから Asko Parpola 教授が、そしてイギリスでは Miss Beatrice de Cardi も加わって、Cambridge において会合がもたれる。その討論の結果、Association for the Promotion of the South Asian Archaeology in Western Europe、つまり南アジア考古学西欧振興会が設立されることになった。隔年に international conference を西ヨーロッパ各国がまわりもちで開き、西ヨーロッパにおける南アジア考古学者の交流の場とすること。できれば雑誌形式で紀要を公刊し、研究発表を掲載すること。これとは別途の方法で各国内や各国間の研究者の交流を促進すること。この三点を柱にするものとの合意に達した。ここに、100年の歴史をもつ南アジア考古学にはじめて、国際協力の場としての専門学会の設立をみたのである。

学会の取り上げる南アジアとは、インド、パキスタン、バングラデーシュ、ネパール、スリランカであり、アフガニスタンとビルマとを隣接国としてこれに含める。こういった南アジアの考古学上の問題について、いちじるしく関連が強いと考えられる場合は、西アジア・東南アジア研究者との連携も考慮する。分野は、先史考古と歴史考古であるが、貨幣学・金石学にも及ぶ。集会開催地は西ヨーロッパに限定する。参加費用は各人負担、集会費用は集会主催者がまかなう。集会参加については、南アジアの当事国研究者もその他の国の研究者も、希望者に制限をつけない。ただし、よほどの経費がかかるので、常に西ヨーロッパ以外の国から出席することは事実上無理である。

このようにしてまず第1回国際集会が先の学会の名のもとに招集され、Sir Mortimer Wheeler の出席をもって Cambridge の Churchill College でひらかれたのは1971年7月のことである。1977年にいたる4回の集会は、イタリアのふたつの発掘 Shahr-i Sokhta (イラン) と Tapa Sardar (アフガニスタン)、フランスの Pirak と Mehrgarh (いずれもパキスタン)、イギリスを中心とした Bannu, Potwar (パキスタン)、そして Vijayanagara (インド)、また西ドイツの Mohenjo daro (パキスタン) に関する発掘の成果が2年ごとに提供され、大きなプロジェクトを柱にする研究発表があいつぐ。1970年代はとくに国際政治や国際紛争による打撃をこの地方を研究する考古学者が受けなかった時代であり、あたらしい発掘にともなう新資料、その解釈によるあらたな地平線があらわれた時代である。1978年のアフガニスタンやイランにおける政変と1979年におけるソ連のアフガニスタン侵略とが、この地方のひとびとばかりではなく、考古学に従事す

るひとびとをも refugee としたことは周知の事実。70年代の活況は一時に平珍し、集会の研究発表も、なお現地調査を許すパキスタンで発掘に従事する先史考古学者からのものが続くなかで、歴史考古の分野は、現地からの新成果ではなく、各研究室にもちかえった資料の整理結果、あるいは各研究者個人の研究成果という傾向へ変化しつつある。

第1回の研究発表は、Norman Hammond 編、Sir Mortimer Wheeler の序をもって、London の Duckworth 社から *South Asian Archaeology* として20篇の論文を掲載して公刊された。以後今回まで2年に1回、7月上旬に開催され、紀要として *South Asian Archaeology 19XX* が毎回発行される。2回目から今回までの細目は次のとおりである。

第2回：1973年7月4日—6日。開催地：Institute of South Asian Archaeology, University of Amsterdam. 主催者：Professor J.-E. van Lohuizen-de Leeuw. 紀要： *South Asian Archaeology 1973*, ed. van Lohuizen-de Leeuw, J.-E. and J. J. M. Ubahgs, E. J. Brill, Leiden, 1974.

第3回：1975年7月。CNRS, Paris. Professor J.-M. Casal. *South Asian Archaeology 1975*, ed. J.-E. van Lohuizen-de Leeuw, E. J. Brill, Leiden, 1979.

第4回：1977年7月4日—8日。Istituto Universitario Orientale, Napoli. Professor Maurizio Taddei. *South Asian Archaeology 1977, Istituto Universitario Orientale di Napoli, Seminario di Studi Asiatici, Serie Minor VI*, 2 vols., ed. M. Taddei, Naples, 1979.

第5回：1979年7月3日—7日。Museum für Indische Kunst in Berlin (West). Professor Herbert Härtel. *South Asian Archaeology 1979*, ed. H. Härtel, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, 1981.

第6回：1981年7月5日—10日。Cambridge, Churchill College. F. R. Allchin. *South Asian Archaeology 1981*, ed. Bridget Allchin, Cambridge University Press, Cambridge, 1984.

第7回：1983年7月4日—8日。Musées Royaux d'Art et d'Histoire, Brussels. Janine Schotsmans. *South Asian Archaeology 1983, Istituto Universitario Orientale di Napoli, Dipartimento di Studi Asiatici, Serie Minor XXIII*, 2 vols., ed. Schotsmans, J. and M. Taddei, Naples, 1985 (非売品).

第8回：1985年7月1日—5日。Unge Hjemsskole, Moesgaard, Denmark. Professor Per Sørensen. *South Asian Archaeology 1985* (未刊).

今回第9回国際集会は、申込者176名、出席者121名の最多の出席者をもって、Venezia は名高い San Marco 寺院の対岸の Isola di San Giorgio Maggiore でおこなわれた。San Giorgio Maggiore 島の東端は、ヴェネツィアの大富豪が第二次大戦で戦死した令息 Giorgio Cini のために、市に全体を寄贈し、そのため Fondazione Giorgio Cini の名でよばれる広大な敷地である。その中に monastèro の壮大な建築群に加えてヨットハーバー、円形劇場、うっそうとした樹木の生い茂る庭園があり、就中僧院の教会堂の鐘楼からみるヴェネツィアは、ちょうど北方に当るから、朝から夕に至る光線の工合によって色彩が変化し、集会の室内の重苦しい雰囲気とうってかわって、アドリア海岸のあかるい風景である。桑山は7月5日から10日に至る間、数回この夢のような鐘楼からの眺望をたのしむ時間を、研究発表のあいだをぬって、もった。

参加者多数はヴェネツィアという土地にもよるが、いかにも5日間でさばききれぬ人数であるため、Section A, Section B, つまり先史部会と歴史部会にわかれ、併行して研究発表がおこなわれる。これは今回はじめてであり、両部会に関心ある者にとっては残念であった。歴史部会も先史部会も7日から9日までは9時半から6時近くまで、1時間半の昼食と午前午後それぞれ1回ずつ20-30分のコーヒー・ブレイクのほかは、立て続けに発表がおこなわれた。初日は9時半に会長の Taddei 教授と主催者である IsMEO の長 Professor Gherardo Gnoli (Istituto Universitario Orientale di Napoli) とのユーモアにみちた短い opening speech ではじまり、そのあとすぐに30分のコーヒー・ブレイクをにおいて、1時まで Islamabad 大学の A. H. Dani 教授がチーラス摩崖佛からみた佛像起源問題を講演。それに先史として、バルチスタンの Nausharo の発掘の成果からインダス文明の編年問題にときおよぶ Jarrige のはなしがあった。その午後はずべてインダス関係の発掘成果であるから、最終日の先史11人の発表とあわせると、先史部門の発表は歴史の1.5倍に達し、パキスタンにおけるこの種の発掘がなお続々と進行中であることをうらづける。

歴史部会は、このような先史部会に対し、文献を用いた佛陀像創成説からかなり時代のくだったヒンドゥー神像の図像やヒンドゥー宇宙論といった、大変に広い意味の考古をおおい、発表は実に多岐にわたる。そこに歴史考古学の動向を見出すことはできない。各研究者が好き勝手にやっていることが反映したのにすぎない。しかし、就中第3日には、もとアフガニスタン考古局長であった Zemarialai Tarzi 氏（現ストラスブール大学）が、在任中に発掘した Hadda の Tapa-e Top-e-Kalan (TTK) を見事なスライドを駆使して説明。ペシャーワル大学の Abdur Rehman 教授の Butkara III と名づけられた

Swat の佛寺跡発掘報告では、佛教彫刻の製作場所が佛寺内部にあったことを示す成果が公表され、注目をひいた。Rehman 教授は、なお活躍中の Dani 教授や Lahore 博物館の S. R. Dar 氏とともに数少ないこの国の歴史考古の専門家であり、今後の活動が期待される。ガンダーラ関係では、ギメ博物館の Francine Tissot 夫人が、Sahri Bahlol について研究発表された。夫人はこの数年間 Sahri Bahlol の旧発掘を、出土品を所蔵する博物館や当時の記録を保存する文書館等を発掘して、洗い直し、もともといがかげんな品物目当ての発掘によって判明しがたくなっていた建物およびその性格と彫刻の出土位置とをつきあわせ、佛寺の復原を検討している。あらたに精密な発掘をして問題を提起する Rehman 教授の方向と、Tissot 夫人の方向とは、同じガンダーラ文化の研究にあって、両輪をなすものといえよう。このほか注目すべきものの中に、D. Mac Dawall 教授の、これも古い発掘資料の洗い直しである、Hadda におけるスツーパー中の貨幣を検討したものがあった。

歴史部会は、従来毎回発表していた Taddei 教授が主催者側、とくに歴史部会の進行統括係であったため、事務に専念されたが、Klaus Fischer 教授（西ドイツ）も Heinrich G. Franz 教授（オーストリア）も健康上の理由で出席されず、ベルリンの Härtel 教授やハイデルベルグの K. Jettmar 教授も従来の活発な研究からは考えられぬやや意外な状態を呈せられ、残念であった。若手はケンブリッジの Erdosy 氏がタキシラの都市遷移を唯一回の現地調査によってまとめた報告をしたり、イタリアの Callielli 氏がスワートの土器による編年を手がけていることを知った。イタリア調査団によるスワートの調査はすでに30年以上の歴史をもつが、“ガンダーラ墓葬文化”の土器についてはしられたものの、ブトカラをはじめとする佛教遺跡出土の土器の研究については、はじめての公表であり、余外のガンダーラにおける土器の研究とあわせ、スワートもまた大きなガンダーラ文化の中につつまれていることが、彫刻以外の面でも十分に判明したのである。

30分という発表時間は、発表者全員にとってきわめて限定された時間であり、せっかくの発表も多くて3つの質疑に終り、いずれの発表も熱のこもったものでありながら、実りある discussion とはならなかった。（桑山正進）

先史の部は比較的人数が多い。その上、ほとんどの人はアジアの新石器時代から金石併用時代までの考古学、特にハラッパー文化にかかわる部分を専門としているようであ

る。言い換れば、ハラッパー文化を中心とする先史考古学という感すらある。このことはハラッパー文化に対する研究が依然として多くの問題を抱えていることを示している一方、近年来活発なフィールド調査や発掘による新しい発見が研究者たちに大きな刺激を与え、関心を高めてきたことも反映しているように思う。例えば、開会初日から J.F. Jarrige 氏による「バルチスタンにおける Nausharo から見られるインダス文明の系列」(The sequence of the Indus Civilization as seen from Nausharo, Baluchistan) を皮切りに、ハラッパー文化一色である。このハラッパー文化と肩をならべて注目されているもう一つの的がある。それはイタリア調査隊 (IsMEO) が主体となって長年にわたって発掘と研究を続けてきた Shahr-i Sokhta である。大会の二日目の発表は、全部 Shahr-i Sokhta をめぐるもので、主催国の意気込みも相当なものである。

さて、ハラッパー文化に関する発表はおよそ次のような点に絞られている。

まず、先ハラッパー文化 (Pre-Harappan または, Early Indus period) をめぐる内容である。それはほとんどフランス学者がおこなった南アジア考古学における近年の「目玉商品」とされる Mehrgarh と Nausharo に対する調査発掘にもとづく研究成果である。J. F. Jarrige 夫妻とその助手たちの発表がメインである。一方、パキスタンの北西部 (Bannu District) において長年にわたって調査をつづけてきたイギリスの学者たちの当地域におけるコト・ディジ文化についての発表もその一部である。それから、いわゆる盛期ハラッパー文化 (Mature Harappan) についてだが、それはおもにアメリカの学者が最近モヘンジョ・ダーロやハラッパー、そして、インドのグジャラート地域などにおいての新しい収穫を公表したもので、G. F. Dales, G. L. Possehl, R. H. Meadow, J. M. Kenoyer それに、イタリアの M. Tosi らの発表がそれである。ところが、後期ハラッパー文化 (Post Harappan) についての議論が相変わらず貧弱のようで、M. R. Mughal がそれにふれただけである。そのほかはインダス文明期における農業、手工業、文字、地理、埋葬など細部にわたった研究もあるが、大きな突破は見られなかった。

Nausharo においては、Jarrige は層位的な発掘をへてバルチスタンにおけるハラッパー文化の編年を完全に成立させることができると宣言して自信を示した。彼によれば、Mehrgarh の上層部 (第Ⅶ期) は自然および人為的な破壊により、不明瞭な点が多いが、ハラッパー文化への移行はその間既に始まったという前の観察は間違っていない。Nausharo で最近得られた証拠はこの観察を裏付けているということである。彼はこの Mehrgarh の最後の段階と Nausharo のシークエンスとを結び付けるために全力をあげているような印象をうけた。もし、それが成功すれば、バルチスタンとインダス平野を

含む広大な地域における先史文化の編年にも適用できる可能性につながると当人はたいへん意欲的である。だが、問題はそう簡単なものではないようである。例えば、彼も認めたように、もっとも文明生成の契機をそなえたはずの Mehrgarh がハラッパー文化が勃興する直前に跡絶えたことは明らかに Nausharo の成立と因果関係にある。そして、Nausharo にあるハラッパー文化は彼によって基本的に「盛期ハラッパー」と考えられている。すると、Nausharo で最初現われたハラッパー文化はそこに起源して成長したのではなく、どこかで相当な発達をとげてから進出してきたものである可能性が強いと当然考えられる。したがって、この未知の地でのハラッパー文化の展開が氏の新しい編年において年代的にどう位置づけられるかの問題が生じてくる。そこで、解決策として氏は Mehrgarh 第Ⅶ期をさらに A. B. C. の三垂期に細分して、その伸ばされた期間に Nausharo が成立するまでのハラッパー文化の展開の時間的幅を消化させようとしたが、Mehrgarh 第Ⅶ期の実年代の幅も把握できないし、その期における「初期ハラッパー」要素の同定もできない現段階ではにわかに賛成しかねる。

G. F. Dales と J.M. Kenoyer らの発表はアメリカとパキスタン考古局の協力で行われてきた「ハラッパー・プロジェクト」の1986—87年度報告のようなもので、特筆に値するほどの新しい内容がない。

G. L. Possehl はグジャラートにおけるハラッパー遺跡 Rojdi のクロノロジーについて再考を行ない、同地域の「盛期ハラッパー」の上限年代を新しい C-14 データに基づいて BC 2680—2640 あたり (Rojdi—A. B) においた。そして、氏はシンドのハラッパー文化との関連を相変わらず認めながらも、地域文化の持続生存力を強調する持論の「ソラト・ハラッパー文化」(Sorath Harappan) について更に一步踏み込んで展開した。

一方、ベシャーワル大学、ロンドン大学および British Museum からなるパキスタン・イギリス調査隊による Bannu District における調査と発掘は Sheri Khan や Tarakai などの先史遺跡を中心として行われたものである。かれらは発表で二つの重要かつ意味深長な事実を指摘し、強調した。その一つは、Bannu においてはコト・ディジ文化の存在だけが確認され、ハラッパー文化はその地域に進出しなかったということがほぼ断定できるということである。この状況は北の方へいくほどますますはっきりしてくる。もうひとつの事実、そのコト・ディジ文化の遺跡から得られた C-14 年代にはかなり新しいデータもあり、ハラッパー文化の年代との並行はいうまでもなく、それより遅いものすらあるという驚くべき事実である。この二つの事実について、ひかえめに

言えば、これまでのコト・ディジ文化とハラッパー文化の関係に関する理解に大きな波紋をなげかけ、それを見直すきっかけとなろう。さらにすこしオーバーに言えば、近い将来には、インダス文明全体について徹底的に見直し、数十年来の固定観念、定説めいたものを覆して、インダス文明に対する新しい理解を成立させる流れの源にもなるかもしれない。実際に、これらの事実は今大会での私の発表の内容に非常に力強い支えとなった。そこで私は、発表者の J. R. Knox (British Museum), K. D. Thomas (ロンドン大学) および F.R. Allchin 等各氏と意見交換をおこない、多くの収穫を得て、私の発表内容について一層自身を深める事ができた。

さて、Shahr-i Sokhta に関する発表は今大会全日程の十分の三強（五日のうち一日半）も占めていた。それは石器、土器、建築、交易 (lapis lazuli)、形質人類学、動物学および地理学などにわたって行われたもので、各研究課題がそろったのが印象的であった。そのうち、特に注目すべきはその課題を総括したような形でなされた M. Tosi 氏の発表である。その中で氏は Shahr-i Sokhta の各方面に表われた独自性を重点的にとりあげ、北のトルクメニア、西のイラン、南のバンプールおよび東のバルチスタン等の同時期の文化と対照して、Shahr-i Sokhta によって代表されたヘルマンド盆地とその周辺の文化に対し、明確に「ヘルマンド文化」(The Hilmand Civilization) という大胆な名称を提唱した。この新しい構想の趣旨は次のようなものである。即ち、先史時代を通じて東西交流の要衝に立った Shahr-i Sokhta およびその代表する文化は、従来考えられたように、単にそこを経過した東西の文化の波を消極的に反映したのではなく、ラピス・ラズリの中継交易で栄えた一つの独特の地域文化として周辺文化の展開に寄与し、東西文化交流の中核として積極的に機能したばかりでなく、そのバランスを調整する役割をも果たしていた。そして、このような Shahr-i Sokhta、いや、このヘルマンド文明を支えたのはラピス・ラズリ交易だけではなくて、ヘルマンド流域の農業こそ主な力である。さて、その参加者たちの耳を一新した説は論議を呼びそうであるが、ディスカッションを楽しみにしていたが、一人に三十分の発表時間を厳守するというので、残念ながらそれが展開されずに次へ移った。しかし、この新しい説に対する賛否についてはともかくとして、それはその地域における考古学がおおきく進歩してきたためごく自然に現われた傾向を示したものと考えてよかろう。この傾向がどう発展してゆくか、そして、この説はどう影響してゆくか、インダス流域とメソポタミアをむすぶ重要な地域だけに、研究の進展につれて、関心がますます高まってこよう。

Tosi 氏に続いて、その日の発表内容は Shahr-i Sokhta をめぐるものばかりであるこ

とは前にも述べたとおりである。つまり、それらの発表は Tosi 氏の新見解を肉付けするという形になったわけである。

ところで、今回の會議においては、アラビア半島、特にオマーンにおける最近の考古学動向も報告された（イタリタ調査隊）。それは従来の西アジアや南アジアにおける文化との比較研究を中心とする姿勢からやや転向して、おもに当地域の文化系列と編年に力を入れる傾向が窺われる。

ともあれ、主催国でもあるせいか、今大会におけるイタリア学者たちの活躍は目立っていた。政治情勢により、イランからの撤退を余儀なくされたイタリア調査隊は一転して Shahr-i Sokhta についての研究を大きく前進させたばかりでなく、アラビア半島、そして、東南アジア（タイ）へ研究の領域を着実にのぼそうとしているようである。

（徐 朝龍）

7月という月は、ベネツィアは観光シーズンのピークで、人口20万足らずの、この迷路のような小都市は、観光客（とくにドイツの）であふれかえる。京都や奈良の比ではない。会に参加する人の宿泊の確保は、主催者にとって最大の問題であるが、Fondazione Cini とベネツィア観光局との尽力により解決された。出席者は毎朝市民と観光客の流れに押されながら運河を通る水上バスで、San Marco までいき、そこで乗りかえて San Giorgio 島へ渡ったのである。主催者はこのために割り引き率の大きい定期券 Carta Venezia を会期中発行する便宜を計られた。しかし、定期券なしでも料金は片道170円ほどであり、京都や東京のバス料金と変らない。ただイタリアではローマに比較すると倍以上の高額であり、主催者側の配慮はそこにあったのである。これから推すと、会場費その他も日本とは比較できない低額のはずである。この種の国際集會が日本でおこなわれる場合どんなことになるかは容易に想像できる。それにしてもこの大会は、大会の前後に日本ではつきものの「儀式」もない。初日は9時半開会ということであったが、9時20分ごろ、会場に入るとまだ登録も始まっていない。その登録もいつはじまったかわからない。やがて長い列ができて登録中だと判るほどである。その列がそのうち消えるところを見計らってやっと opening speech があり、すぐさまききのべた Dani 教授の発表に移ったのである。最終日も同じよう、やや長びいた先史部会が終ると同時に、時を移さず、次回開催地の主催者 Jarrige 氏が次回 Paris の Musée Guimet でおこなわれる旨宣言したのみである。そのあと、とび入りで Ashmolean Museum の

Harle氏が謝辞をのべて拍手喝采であったが。とりたてて贅をつくしたレセプションもない。ワインによる乾杯が最終日に会場となった僧院の美しい中庭であったのみである。どこかの国では国際集会となると必ずや経費膨大かつお祭り騒ぎの催し物であるが、このヴェネツィア集会が終始5人（うち2人は事務にたずさわらない）で運営され、経費も招待学者関係費を含めて300万円だと聞いたときには驚きを通りこしてうらやましさがついたのである。

（桑山正進）